

一中だより

令和8年10月2日

第7号

作成者：荒川区立第一中学校長 小柴 憲一



発達障がいを含めた個性の理解の推進のために

東京都では、平成16年度からそれまでの心身障害教育から、LD、ADHD、高機能自閉症等を含め障がいのある児童・生徒一人一人のニーズに応じて適切な教育的支援を行う特別支援教育への転換を図りました。これは、特別な場だけで行われていた従来の心身障害教育から、通常の学級でも行われる特別支援教育への転換であり、教育界では大きな変化でした。

しかし、当時は、まだ「軽度発達障害」という誤解を招く用語が使用されていたり、保護者や都民には十分に啓発がされていなく、学校現場では発達障がいがあると思われるお子さんの保護者に検査を受けることを勧めても全く受け入れてもらえなかったり、そのことにより学校と保護者がトラブルになったりするなど特別支援教育への円滑な移行は困難な状況でした。また、教職員の間の議論でもLD・ADHD・アスペルガーなどの診断名ばかりが先走って、子ども一人一人が何に困っているのかという最も重要なアセスメントを怠ってしまったり、文部科学省が資料として公表したデータのうちで「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある児童生徒は6.5%」の箇所だけが大きく報道されてしまい、「誰と誰があてはまる」などの偏見に基づく話題が保護者間などで話されたりするようになってしまったこともありました。

あれから22年経ち、ようやく発達障がいという用語は広く知れ渡るようになり、今では、保護者から「うちの子どもに、一度、検査を受けさせたいんですけど」というご相談も受けるようになりましたし、「うちの子は…が苦手なもので」と保護者間で話される場面も見られるようになりました。

発達障がいがある場合、早期発見・早期支援が最も重要だと言われます。なぜなら、障がいの状況は様々ですが、●不注意なミスが多かったり、●気になったことにはこだわってしまってそこから先に進めることができなかったり、●身の回りの整理整頓をすることが苦手だったり、●誰かに言われた冗談をその言葉通りに受け止めてしまったり、●落ち着いて座っていることが苦手だったり、●特定の学習に極端な困難を感じたりするなど、いずれにしても対応が遅れることにより、円滑な対人関係を構築しづらくなったり、失敗体験を積み重ねてしまい自己肯定感の低下を招いてしまうなどにより、生活すること自体を苦痛に感じてしまうようになってしまったりします。そして、例えば、不安症やうつ病などの精神疾患が合併してしまう場合や、逆に、反抗・暴言・対人暴力・器物損壊などを起こしてしまう反抗挑戦性障害というような状況に陥ることもあると言われています。

本校では週1回、上記のような困難を感じていると思われる子どもに関して情報交換し、支援策を検討する特別支援教育校内委員会を開催していますが、その会議の中で保護者の理解を得る方法や、特別支援教室（I-Class）への入室を薦めるかどうかなどの検討をすることもあります。つきましては、教職員からそのような話があった場合は、教職員一個人の観察や判断によるものではなく、校内の組織の検討結果によるものであるということをご理解ください。

発達障がいには、早期発見・早期支援が最も重要ですが、支援の鍵となる周囲からの正確な理解はとても効果的です。中学生という発達段階では、特に、1年生の子どもでも、「あっ、あの子は…」と察知して「慎重に対応しなければいけないのかな」という状況をこれまでの経験から感じるようになります。しかし、正確に理解しているわけではなく、適切な接し方が分かっているわけでもないで、子どもによっては「親切に教えてあげて、逆に不機嫌になられてもいやだから教えるのをやめようかな」とか「ちょっかいを出されてきてイラッとするけど無視しよう」とか「冗談を言ったことによって『いじめられた』と思われる面面倒だから関わらないようにした方がいいかな」などと、分からないからこそ起こってしまう適切とはいえない接し方になってしまうことがあります。そこで、教職員から学級や学年の子どもたちに、「お子さんの状況を説明したほうがお子さんのためになると思うのですが」という働きかけをすることもあると思います。しかし、当該のお子さんの保護者にとっては、「説明しても理解してもらえないのでは」「説明するとかえって偏見をもたれてしまうのでは」という心配が強くなるのは十分理解できます。

そこで、私が過去に学年主任として1年生から2年生にもち上がるときに他の中学校から転入してきたAさんのケースについて紹介します。

転入前の3月に、Aさんの保護者から「Aさんがトゥレット症候群とアスペルガー症候群の診断を受けていて、今の中学校で友達から嫌がらせを受け転校を決断したが、それでも同じような嫌がらせを受けてしまうのではないかと心配である」というご相談を受けました。

そこで、今通っている中学校に行きAさんを観察したうえで、保護者に対して、転入する新2年生の子どもたちに、4月の段階で「Aさんの状況説明と、どのように対応したらいいかということの説明したらどうか」ということを提案し、実際に私が説明する文章を作って保護者に添削していただき、4月の第1週目に以下のような説明を学年の子どもたちにしました。

話しやすい話し言葉、語尾などの変化はありますが、「趣旨」「使う用語」「話すニュアンス」は変えません。また、音や動きを私が真似て示すことはせずに、ここで表現した言葉で伝えます。また、2年生という発達段階から、「トゥレット症候群」「アスペルガー症候群」という名称は出さず、また一般的な障がいに関する話しについては触れず、△△さんの特性に絞った話しをします。

<本日の話の目的>

今日は、皆さんにお願いがあります。

2年生、〇〇〇名がこれから2年間、お互いに過ごしやすいと思えるようにするための一つのお願いです。それは、今度転入してきた〇組の△△ △△さんのことです。△△さんが時々する動きや言う言葉について分かってもらいたい、あるいは分かるように努力してほしいということです。

<△△さんが困っていること>

△△さんは今、自分でも困っていることで病院に通っています。

△△さんは、どういうことで困っているかというと、例えば、●大きな声が突然出てしまったり、●喉のあたりであまり聞かない音、うなっているような音が突然出てしまったり、●あるいは、いけないと分かっているのに、乱暴と思われる内容や、きれいではないことを言ってしまうこと、それから●腕や肩が突然大きく振れてしまったり、●首が痛くなるほど、急に首が振れてしまったり、●体を揺すってしまったことなどです。時には、字を書きたいのに書けないほど動いてしまうこともあるようです。

<△△さんへの基本的な理解の原点>

皆さんに、まず、分かってもらいたいことは、●△△さんは、したくてしているのではないし、●むしろ、したくないのにしてしまうということです。

△△さんはもちろん、お家の方も、「ほかの友達からどのように思われるのか」と、とっても不安ではないかと先生は思います。

<△△さんへの具体的な配慮>

そこで、具体的に△△さんのことをどのように理解しようとしたらいいのか、どのように接したらいいのかのお話を5つします。

1点目は、△△さんから聞こえてくる突然の音や突然の動きにびっくりしないことです。

これからの生活で、もしかすると、△△さんからあまり聞かない音が突然聞こえてくることもあるかもしれません。あるいは、急に△△さんの腕が大きく動くことがあるかもしれません。

そんなとき、最初は「あれ」って思うかもしれませんが、気にしないようにしてください。

2点目は、△△さんが誰かに傷つくような言葉を言ったとしても、その人を傷つけるつもりはないということを理解することです。最初は、みんなもいやな思いをしてしまうかもしれませんが、でも、いつもよりちょっと我慢をしてみてください。そして、先生に教えてください。先生から、△△さんに「こうした方がいいよ」と伝えて、ごめんなさいをもらうように話します。

3点目は、言うてはいけないことを△△さん自身が覚えていないことがあるということを頭の片隅に置いておいてください。もしかすると、「あんなことを言うて覚えていないふりをしている」と思うことがあるかもしれませんが、△△さんは決してふざけているわけではありません。「ふざけてる」と思ってしまった人にはちょっと難しいかもしれませんが、少し優しく「・・・って言ったんだよ」と教えてあげてください。△△さんは、たぶん「またやっちゃったか」とがっかりすると思います。その姿を見て、「ふざけていたわけではなかったんだ」と思うことができるでしょうし、励ましたい気持ちになったらすごいですね。

4点目は、△△さんとお話をしているとき、「あれ、分かっているのかな」と時々感じることもあるかもしれませんが、そんなときは、あせらずにゆっくりと「こういうことを言うてるんだよ」と順序よく分かりやすく話してみることです。

最後に、5点目ですが、先生が今お話をしているときに、どんな音がするかとか、どんな動きをするかについて、「こんな感じだよ」と真似して見せなかったですね。

私たちみんなそうですが、失敗してしまったことを真似されたりしていい思いをしますか？それと同じことです。△△さんも、突然出してしまった音や、してしまった動きや、いけないことを言うてしまったことや、それを覚えていなかったことや、上手にお話ができなかったことについて、「やっちゃった」とがっかりしているんです。ですから、ふざけてそれを真似してみせるというのは、人としてやってはいけないことです。

遊び半分や、笑いながら、みんなでなど、ふざけて△△さんの音や動きなどの真似をすることは、「みんなで許さないんだ」という雰囲気をつくってください。

<学校の願い>

先生たちは、●みんなが、△△さんのことを分かってあげようとしてくれて、●△△さんが「突然声が出たり動いてしまったりする」ことを気にしないようになってくれて、●最終的に、△△さんが学校に来る不安が少しでもなくなってくれればと思っています。そして、そんな居心地のいい学年集団を作り上げる一人一人になってくれたら、たくさんの課題を解決していける強力な組織になると思っています。

このお話をすることは、△△さんのお家の方にもご了解をもらっています。

もし、△△さんのことで、皆さんがどうしたらいいか迷ったときは、先生たちに相談してください。先生たちも△△さんやみんなと一緒に考えていきたいと思っています。

この説明をする学年集会の場だった、体育館の入り口のすぐ外にはAさんの保護者に来ていただいて、同じ原稿を手にして聞いてもらっていました。そして、その後Aさんは、学級・学年の子どもたちから理解を得ることができました。また周囲の子どもたちも、一瞬「カチン」とすることはあってもすぐに接し方を思い出し、「どうしたらいいか分からない」という、解決策を導き出せないストレスを感じることなく過ごすことができました。さらに、私たち教員も、あいまいな表現ではなく、「Aさんは、今このことに困っているんだよ」ということをはっきりと説明することができました。

こんなことも、子どもたちに個性を理解させる手段の一つであるということをお知りおきください。

お知らせ

- 10月18日(日)に開催される「南千住なかよしまつり」に、以下の子どもたちがボランティアとして応募しました。
2年・・・三上 隼斗、河城 優生、芳家 皐
3年・・・佐藤 さやね、林 弥広
- ソフトテニス秋季新人大会で、以下の成績を収めました。
第3位 石橋 明佳・浦 有咲 組